

柱人社は、展覧会を一回開いた後、小倉淳が大正七年十二月に急死したこともあって解散してしまいが、それは装飾美術協会結成へつながる発展的解散であった。

### ⑧ 本多利実死去

『東京美術学校校友会月報』第十六卷第六号所載の追悼記事（屋代晃江著）によると、本校校友会には明治二十四、五年頃から同三十年頃まで弓術部があり、一時期中絶した後、同三十五年二月に復活した。本多利実はこのとき師範として招聘され大正六年十月十三日死去するまでの十六年間指導にあたった。本多家は竹林派の弓術をもって代々徳川幕府に仕え、利実は天保七年に生まれ、もとの名を橋之助または廣といい、生弓齋と号した。明治維新後大学史生、文部史生、内務少録、巢鴨村長等を経て明治二十六年芝西久保八幡神社祠官となつてからは弓術界のために尽くし、第一高等学校、日本体育会弓術部、本校、東京帝国大学、華族会館、学習院、千葉県師



本多利実

範学校、千葉医学専門学校、真宗大学、大日本弓術会等の弓術指南をつとめ、大正五年には弓道館を興して館長となり、その名声は一世を風靡した。晃江はその弟子で、彼は師の歿後、本校弓術部副指南および東京帝大弓術教導補助となった。

### ⑨ 香川勝広死去

もと教授香川勝広の死去を『東京美術学校校友会月報』第十五卷第七号は次のように伝えた。

○香川勝廣氏逝去 香川勝廣氏胃癌を患ひ一月十五日遂に逝く、〔大正六年〕翁は幕末の彫金大家野村勝守の門に出で、更に加納夏雄翁に就て學ぶ所あり、故海野勝珉翁と並び稱せられ、遂に帝室技藝員を命ぜらるゝに至る、明治三十一年本校教授に任ぜられしが翌三十二年六月退職す、日清戦役當時先帝御佩用の菊一文字の御劔の裝飾を命ぜられ前後四年に互り苦心製作せしもの、翁一代の傑作なりと傳へらる、其得意とする所は片切彫なりしと云ふ、享年六十五歳。

なお、『美術新報』第十六卷第四号（大正六年二月）にも訃報と略歴が掲載されている。

### ⑩ 沢村専太郎（号胡夷）のインド旅行

沢村専太郎は明治四十二年、京都帝国大学文学部哲学科（美学美術

史専攻)を卒業し、さらに東京帝国大学大学院で近世日本美術史を研究したのち、同四十四年より本校の「美学」講義嘱託教師となった。彼は大正六、七年にかけてアジャンター石窟をはじめとするインド美術の調査に赴き、帰国後半年の間、本校でインド美術史特別講義を行なった。同八年八月には京都帝大助教となり、同年九月に本校を去っている。

沢村のインド旅行については『東京美術学校校友会月報』第十六卷第四号に次のように記されている。

●アジャンタ壁画の摸寫 國華社にては西印度アジャンタ窟院の壁画を摸寫して學界に寄與するところあらんとして、外務省及び本邦駐劄英國大使グリム氏の盡力を乞ひ印度ハイデラバード土州政府の許諾を得たれば、本年冬季に於て第一期の計畫として試みに其一部を摸寫するの計畫を立て、美術院の畫家荒井寛方朝井觀波氏を派遣したり。また、文學士澤村專太郎氏は監督者として同地に赴き兼ねて印度各地の美術史蹟を巡遊研究すべしといふ。

アジャンター石窟はマドラス註屯の英軍武官連によって一八〇三年に発見され、同じく英軍のアレキサンダー中尉がローヤル・アジア協会に初めて公式報告を行い、それ以後著名なカンニングハム、ファルガッソンの研究が始まり、ギル、グリフィス、ハーランガム女史その他による模写や写真撮影が行われ、次々と大著が刊行さ

れて世界的遺跡として知られるようになったという。わが国では岡倉天心が明治三十五年にここを訪れ、法隆寺金堂壁画との技術上の関連性に着目し、次いで翌三十六年には伊東忠太が訪れた。大正元年には瀧精一が訪れたが、瀧はのちに「印度あじやんた石窟寺の壁画」一―四(國華)第三二二号―第三二五号。大正六年三、四、五、六月)を発表している。大正期には和田三造(明治三十七年本校西洋画科卒)のような画家も訪れている。和田は大正五年七月三十一日の『大阪朝

日新聞』にアジャンタ石窟の探検記をインドから寄稿し、同六年五月の『美術新報』第十六卷第七号でも同石窟に関する所見や写真、模写を発表している。したがって日本でもかなり一般に知られるようになり、また、折りから法隆寺金堂壁画の保存問題がクローズアップし、古代壁画への関心が高まっていたときであったため、瀧精一らの主唱で國華社が模写団を派遣することになったのである。そこで日本美術院同人の荒井寛方が模写主任となり、院友朝井觀波が助手となり、追って桐谷洗鱗(明治四十年本校日本画科卒)、野生司香



沢村專太郎

雪(同四十一年同科卒)も参加して大正六年十二月より翌七年三月にかけて壁画の主要なものを摸寫した。主任の荒井寛方は詩人タゴールが来日した際(大正五年)にタゴールが経営するピットラ美術

学校教師に招聘され渡印し、傍ら壁画模写に従事したもので、大正六年十一月十五日、細川侯の援助でインド旅行に行く片山南風とともに出発した。桐谷洗鱗は印度研究会より壁画の模写を依頼されてアジャンターに赴いた。

沢村はそれらの監督を依託されていたが、ほかに本校からもアジャンター石窟壁画の調査を依託された。彼は、大正六年十月二十六日に出発し、十二月一日にボンベイに到着。帰国は翌七年五月十七日である。帰国後、『東京美術学校校友会月報』第十七卷第四、第五号に寄稿した「アジャンターの生活」には石窟に至る道中の模様、壁画のありさま、虎や野猪、蝙蝠の出没、インド人画家らとの交流のことが詳しく記されている。彼はムクール・チャンドラ・デー（タゴールの来日に同行した画家）とともにアウランガバットの窟院やドルタバートの古城、エローラやナーシックの石窟なども訪れた。

壁画の摸本は大正七年三月国華社に到着。同年十月日本橋倶楽部で展観がなされ、同時に沢村将来のアジャンター石窟銘文、文様の拓本も陳列され、瀧精一と沢村専太郎の講演があった。『国華』第三四一号（大正七年十月）に詳しい記録がある。大正八年には大阪朝日新聞社、京都帝室博物館でも展観された。なお、沢村は大正七年に『国華』第三四一、三四三、三四五号に「西印度ガトートカッチ窟院について」を、また、大正十年に至って同誌第三七七、三七八、三八三、三八五、三九三、三九六号に「アジャンター石窟寺の彫刻的文様について」を発表している。

#### ① 狩野芳崖碑建立

大正六年十一月四日、狩野芳崖の三十回忌の前日に谷中長安寺の墓の傍らに故人の遺徳を称える碑が建てられ、追遠会および遺作展観が同寺で行われた。碑は浜尾新の篆額、三島中洲の撰文。